

開催地名：愛媛県今治市	
開催日時	令和2年12月15日（火） 13:45～15:15
開催場所	今治市立富田小学校
語り部	武藏野 美和（岩手県陸前高田市）
参加者	富田小学校6年生児童、教職員、保護者 約130名
開催経緯	本市では大きな災害を経験していないため危機意識が低く、災害から身を守る知識や技能が十分身に付いていない。今回、東日本大震災の語り部のお話を伺うことで、防災に対する意識付けのきっかけとしたい。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私が住む陸前高田市は岩手県南部の太平洋側に位置しており、隣は宮城県で、昔は伊達藩の城下町であった。岩手県の中では比較的温暖な地域で、小さな街であるが、きれいな風景の場所がたくさんある。特に有名なのが、過去の度重なる津波から高田の街を守ってきた、約7万本と言われる高田松原であるが、ほとんどが流されてしまった。その中で唯一耐え残ったのが「奇跡の一本松」である。津波に耐えて奇跡的に残った一本松も、海水により深刻なダメージを受け、翌年に枯れてしまった。しかし、震災直後から、市民のみならず全世界の人々に復興のシンボルとして親しまれてきた一本松を、今後も後世に受け継いでいくために、陸前高田市ではモニュメントとして保存整備することにした。このような陸前高田での東日本大震災の話に基づき、今日は「防災」についてお話ししたい。</p> <p>（2）東日本大震災の被害状況</p> <p>三陸沿岸は昔から津波の被害を受けてきた。さかのぼれば明治三陸大津波や昭和三陸大津波、チリ地震の津波の被害が有名である。これらの津波被害を受けて対策がとられてきたにも関わらず、また、情報網が整備されていたにも関わらず、東日本大震災では多くの犠牲者が発生した。市役所や図書館、体育館、公民館、小中学校や保育所等の多くの施設が全壊した。今でも仮設住宅に住む人たちも多く、毎月11日の「月命日」には、海岸沿いで自衛隊や警察の方々が捜索作業を行っている。</p> <p>（3）災害は必ず起こりうる</p> <p>日頃から「万が一」を考え、自分の命を守るための「備え」を意識してほしい。また、避難と避難所へ行くことは同じではない。身の安全が確保できるのであれば、とどまることも重要であるし、ストレスが大きい場所にあえて行く必要はないと言える。家が安全であれば家で生活してもらって全く問題ない。究極の防災は、逃げなくても良いところに住むことだ。家には3日から7日程度食べつなげる食材をストックしていただきたい。長期保存の必要はなく、日常の中に食料備</p>

蓄を取り込むという考え方だ。普段から少し多めに食材、加工品を買っておき、使ったら使った分だけ新しく買い足していくことで、常に一定量の食料を家に備蓄しておく、「ローリングストック」という方法をお勧めしたい。

避難所での避難生活では、一般的な備えしかない。アレルギーに対応した食品や、赤ちゃんのミルク、個々の病状に応じた薬等、個人にとっては必須のもので、一般的なものの以外は用意されていないのが現実である。自分にとって必要なものについては、自分で備える必要がある。

自分の命を奪ってしまうもの、そのすべてが災害である。交通事故も、新型コロナウイルスも、地震や洪水なども、すべてが災害である。そして、これらの災害を防ぐことが「防災」だ。交通事故や新型コロナウイルス感染については、工夫することで未然に防ぐことができるが、地震や洪水などの自然災害については、いつ起こるかわからない。それでも、自分の命は自分で守ることが鉄則なので、自分の住む地域の災害リスクをハザードマップなどで知ることは必要であるし、以前の津波や洪水の被害について知ることも大切なことだ。

みんなが普段何気なく過ごしている毎日は、きっと楽しいことがたくさんあると思う。そのような普段の生活を守っていくために必要なことは何か、自分で考えることが大切である。そして、その考えをもとにして、実際に行動していくことが「防災」につながる。自分のために考え、備えてほしい。



開催地より

陸前高田市が受けた津波被害の実際の状況を改めて認識して、そのすさまじさを痛感した。非常に分かりやすいお話で、「防災」について考えさせられた。防災マニュアルの見直しと地域の自治会の連携、児童や保護者に対する防災意識の高揚、自主防災のための非常持ち出し袋の準備や備蓄の呼び掛けを進めていきたい。